



周防長門名所和歌（多賀社文庫19）

文書館資料で
旅する山口県

防長紀行

* 11

名所 ⑤

周防長門名所和歌をたどる(1)

《名所と歌枕》

「歌枕」というと、和歌に詠み込まれた土地のことを指すと思われる方が多いのではないかと思います。実際その通りなのですが、本来は、和歌に使われることば全般を指したそうです。次第に特定のイメージと結びつき、特定の使われ方をする地名を指すようになり、さらに、単に和歌に詠まれた地名や名所も指すようになっていったそうです。ある場所が歌に詠み込まれて歌枕になる、という感じでしょうか。

歌枕は、和歌を詠むうえで欠かせない知識の一つでした。これを頭に入れて過去の歌を解釈し、それを踏まえて新しい歌を詠むことが求められたのです。そのため、平安時代以降、歌枕をまとめたものが作られるようになっていきます。

そのような人たちにとって、歌枕の多くは、歌から抽出されたイメージで形作られる、どこか遠い地でした。それが、戦国時代以降、京都と地方との人の往来が頻繁になるに従い、歌枕は訪ねられる場所へと変化していきます。歌枕は訪れるべき「名

所」となり、江戸時代の地誌や名所案内にも掲載されるようになっていきました。

《防長の歌枕》

江戸時代の防長の人たちも、両国の歌枕に関心を持っていたようです。

上の写真は、防長両国の歌枕と主な和歌を書き出したものを、19世紀前半に多賀神社（現山口市）の大宮司を務めた高橋右文（有文）が書写したものです。

行頭から大きく、楷書気味に歌枕を書き、その下にどこがその地に該当するのか、考察を書いています。続いて主立った和歌と右肩に出典を記します。朱書は右文による註です。

次の頁に、この資料に書かれた歌枕と和歌、出典をまとめました。まずはクラシカルな防長の「名所」をお楽しみください。

主要参考文献：井戸美里編『名所の誕生—「名を与えられた風景」』、思文閣出版、2025年／高橋良雄『歌枕の研究』、武蔵野書院、1992年／樋口百合子『歌枕名寄』継承と変遷』、和泉書院、2024年、宮野恵基『歌人が巡る中国の歌枕山陽の部』、文化書房博文社、2014年



多賀社文庫
と高橋右文

多賀神社大宮司高橋家は、歴代文事に優れていたようで、右文自身も国学をよくし、自ら研究、考証をおこなっていました。

そのため、右文が当主を務めた頃の多賀神社には相当数の蔵書や記録が蓄積されていました。現在、これらの多くが県立山口図書館と当館に寄託されています。

	歌枕	歌	出典
周防	① 大島	筑紫路のかたの大島しましくもみねは恋しき妹を置て来ぬ	万葉集
	② 大島鳴門	大島の鳴門を過るとなれや夜舟ちかき松風の声	為尹千首
	③ 室積	むろつみやかまとを過る船なれ八物をおもひにこかれてそ行	家集（俊頼集）
	④ 竈戸	室津見やかまとを過る船なれ八物をおもひにこかれてそ行	家集（俊頼集）
	⑤ 磐国山	周防なる岩国山を越ん日八手向よくせよあらしきその道	万葉集
	⑥ 麻里布浦	真楫ぬき舟しゆかすは見れとあかぬまりふの浦にやとなりかせまし (やとりせましを)	万葉集
	⑦ 祝島	家人八かへりは□□（やこ）といはひしま祝ひまつらん旅行我を	万葉集
	⑧ 可良浦	沖へより夕満くらし可良浦にあさりする鶴鳴て噪きぬ	万葉集
	⑨ 勝間浦	思ひいてよ千世の子日のけふ毎にかつまの浦の岸の姫松	万葉集 (清原元輔集)
	⑩ 勝間宮	千早振かつまの宮の姫小まつおひを手向てつかへまつらん	歌枕名寄
	⑪ 笠間島	あらしたに笠まのしまを吹やまはさバのこをり八薄く成なん	夫木和歌鈔
	⑫ 竹島	竹島の跡しらなミ八とよめともわれ八家おもふいほりかなしも	万葉集
	⑬ 氷室池	氷りにしひむろの池も冬なから東風ふくかせにとけやしぬらん	夫木和歌鈔
長門	(1) 長門島	君か代八長門の島の小松原かみさひて又若葉さすまで	千五百番歌合
	(2) 長門浦	乙女らか桶にたれたるうみをなす長門の浦に朝□（籬）に□満くるしほ のー余長く候二付略（長歌）	万葉集
	(3) 安武郡	長門なる安武のこほりの杣板は唐土人もすさめさりけり	新撰六帖題和歌
	(4) 安武松原	はかなしな心つくしに年おへていつともしらぬあふの松原	千載集
	(5) 豊浦宮	堤を八豊浦の宮につき初て世々をへぬれと水八もらさす	新勅撰和歌集
	(6) 豊浦里	しら波のたちなから□□（たに）長門なるに（衍）豊浦の里のとよら □（れ）よかし	後拾遺和歌集
	(7) 豊浦島	よそに見し豊浦の島の二夕心ありとときけ八さらに頼ます	新撰六帖題和歌
	(8) 門司関	旅人の心つくしの道なれや往来ゆるさむもの関守	続千載和歌集
	(9) 赤間	なみたゆへ袖も赤間の関なれやころは紅葉にもちかくせとも	拾玉集
	(10) 奥津借島	長門なる沖つかり島おきまゑて我思ふ君八千とせにもかも	万葉集
	(11) 時の浦	思ひいつる時の浦にもうき人八忘貝こそひろはれにけれ	歌枕名寄
	(12) 亀の頭	田鶴の居る亀のくひよりこき出て心ほそくもなかめつるかな	家集（俊頼集）
	(13) 麻利の岡	まりの岡何をか>りと思ふらんかたうつ浪の音はかりして	方（不明）
	(14) 阿胡海	あこの海の荒磯のさ>らなみ（下の句欠）	万葉集
	(15) 阿須波浦	こふれともあす八の原にさく萩の花とちりなん名こそほしけれ	類聚
	(16) 面影山	別れにしつらさや今も残るらんおもかけ山の有明の月	歌枕名寄

【凡例】「歌」欄は、異体仮名を常用にした他は原文ママとした。また、□は虫損による判読不能字を示す。／「出典」欄は原文が略称を用いていたため、元の名称を記した。／全体に、()は筆者による校訂、修正等を示す。